

## 一層半のドヤから

鈴木 景久

日雇労務者になつて、何年になるだろうか。はじめて、

より安いのが良い。

峯ヶ崎にきた時と、今と、自分の中で何か変ったものが、あるのだろうか。オレって、どうなつていくのだろうか。

毎日、朝四時三十分頃に、目が覚める。仕事にいく時も、雨の時も、二日酔いで今日は休もうと思つても、目が覚める。

枕もとにおいている、ずうつと前の日の、会社勤めのしていた時の、今はたつた一つ残った腕時計も競艇に負け、仕事にあぶれたとき、質屋にもつていつたら、二千円貸してくれたつけ。今はガラスがキズだらけでもう貸してはくれないだろう。

ドヤもあちこち変つたが、センターにほど近い、一日四百円、一層半の部屋にきめて、もう二年になつた。何

出づら現金四千五百円で、一割以上のドヤ代だと、シンドイという気が身にしみている。これが、五百円であろうと、六百円であろうと、一日の出づらから見ると、ショウチュウウ一ぱいか・ビール一本多くのまなければ、三層の部屋に休めて、寝返り打つても、身体をぶつつけないですむものであるが、五日分のこと、仕事にあぶれた時のことを考えると、その差額は五百円或は千円となり、いつもドヤ代と、めし代と、飲み代におわれている身にとつては大金である。

オレの一日は、センターに行くことからはじまる。

センターの一階でめしを喰う。めし大百円、玉アカ八、十円、玉子焼八十円、計一百六十円。近頃は朝からカレ

一ライス百八十円、玉アカ八十円、計同じく二百六十円。ます朝喰べておかないと、土工雑役、建築カタヅケの仕事は、肉体労働なので、人なみにできない。よくオカラになつた時、昼まで一日酔と共にふらふらで働くが、腹がへるという飢餓恐怖感は、いつものことであるが、いやなものだ。

でも今では、朝めし呑めし付きの人夫出しのところも知つてゐるし、千円だけは、タバコ代朝めし代にドヤにおいて、ギャンブルに或は飲み代に、はたくようになつた。これも生活の知恵が、ついたのだろう。

仕事が多いときは、センター横づけの手配師の呼び込みによつて、どれにでものつていく。仕事の内容はどこも、何日間か続けていくと似たようなものであるが、昼めしはひどいのがある。ボリエチレンのバックに、めし中位の量と、オカズは焼魚ひときれ、シオコブ少々、うめぼし一つ、これは、大もネコもよけて通る昼めしだと、その日はじめてあつた仲間と言い合うことで、互に苦笑しあい、それでも全部喰べる。

ところが、仕事がなくなつた時に、手配の車がきても、仕事にいこう、現金いこうと、声かけてくれなくなつた。顔づけといやつ。毎日いっている人、手配師が気にい

の一ぱいは、なんといつてもうまい。  
どうせ働かない、西成のアンコだということで、こきつかわれただけに、腹がへつている時の一ぱいのビル、この冬の季節のアンカンは、身にしめる。この一ぱいはひどいのがある。ボリエチレンのバックに、めし中位の量と、オカズは焼魚ひときれ、シオコブ少々、うめぼし一つ、これは、大もネコもよけて通る昼めしだと、ただろう。次の一ぱいも、またうまい。

酒のあてに酒と、飲むほどにうまくなるから泥酔してしまつ。

明日への何のつながりも責任感もあたえられない一日だけの仕事で、肉体労働の切り売りにおいて、朝目が覚めて、二日酔の頭で考えることは、反射的に、何の東博もためらへもなく、休んでしまう。

何の保証もない日雇労働者の特権にて、歴三氣ミミに休み、そしてその日にまた、オケラになる。

仕事中に、右腕が曲らず、痛いことに気づいた。一月ほどほつておいたが、仲間から医療センターにいってみたらといわれた。俺としては、その時、日雇保険もなかつたし、まして医者にかかる金など、一円もあり得ない。しかし、この痛さに、ままよどうにでもなれといふ氣で、医療センターに行き、金出来たら支払います、というサインで、診察を受けた。

つてゐる人のみ、車にのせていく。これにはまいった。いくら出づらが安くとも、いつも仕事があつて、声かけ、てくれる所を、みつけなければならない。それでこの更に、一つの現場に終るまで働いた。

一つの現場にいつて、自分で少しでも良いと思つたら、その現場につめることが、優先的に仕事にありつく。そ

れと明日の仕事の内容がわかつてゐるということは、知らぬ現場にいくより、朝の気分を楽にしてくれる。

仕事にあぶれた時、金がなくなつた時、飲み代もなくなつた時、俺だつて子供のこと、いなかのこと、父母に育てられたこと、前のことを思い返すことはある。

俺も会社に勤めていて、ボーナスを貰い、家もあり、妻も子供もいたつて。あの団鑿とかいうやつの家庭があつた。時々思い出す。でも後悔だけはしない。俺の生き方の流れは、生まれた家、子供の時のしつけ、学歴、そして出合つた人によつて影響をうけ、自分できめて、こうなつてきたのだから。

アルコールづけになつて、十六年位になるかな。ビル、酒、ショウチュウ、ウイスキー、その時と場所と、持ち合せによつて何でも飲む。でも、仕事が終つてから

單に腕の関節に水がたまつてゐると思つていて。医者も水をぬいてくれたが、血の検査をしようといわれた。腕の動かないこと、水のたまつてゐることと血液の検査とは、無関係と思つたが、金がないのにやつて貰えることなので、黙つて受けた。次の日から仕事にいき、十日ほどたつて仕事にあぶれ、腕は前より動くようになつて、結果だけ聞きに行こう、ゼニの催促されたら困るなあと思ひながら出かけた。ゼニの催促はなかつたが結果は、君は痛風だ、このままだと腎臓を犯され尿毒症になり、統計によると四十四才までの寿命だといわれた。

痛風なんて、重役とか高給取りで、せいたくざんまい金持ちの病気と思っていたが、野球選手、音楽の花つ明した、いろいろこじつて、肉体労働に関係あるのかも知れんと思った。医者によると、痛風は、もつて生まれた体質によるが、食事では、ホルモン、レバー、キモ、心臓と、ビルと酒のチキンポンが、最も悪く、それらの常用者は痛風の予備軍で、一度かかると、血液の中の老廃物を体外へ排泄する薬を、一生のみづづけなければならぬといふことである。

痛風をおこす血液中の老廃物を、尿酸といふらしいが、俺は今、九・二あります。通常、男子で六・〇なので、約五割増、まあ、痛風の平均寿命までにあと数年あり、そ

間は、生きていることを、保証されていると楽観している。

バチンコ、麻雀、競輪、競艇、競馬、何でもする。

ゼニがあれば、ギャンブル休日の水曜日まで、遠方で  
も、強さんかわからぬ春木の草履馬でも、出かけた。  
春木は今ではないが。

しかし、何といつても、俺は、ギャンブルが大好きだ。  
全く勝たない。もうずっと、大勝したためしかない。  
しかし、能がきをいわしてもらつたら、バチンコの機械  
の裏の構造から、くぎの調整、コンピューターを使って  
出玉率をコントロールしていること、麻雀のイカサマの  
手口、自転車のギャーの倍数、ポートのブレーキ、ビストン  
クリング交換の意味まで専門家はだしだ。

有金全部持つていって、全レース買う。一万円あれば  
一万円なりに、千円あれば千円なりに、電車賃のみ残し  
て最後の百円まで賭ける。

ポートでめしを喰つている人も知つてゐる。しかも、  
この人は、朝の九時から最終レースまでおり、そして月  
二十万円位になり、土方するより良いと本人はいついて  
る。この人のモットーは、舟券を買わないということだ。

つまり、レードスでこれだと思い一万もうかつたら、ど  
あればわかる。

庭生活など成り立ちようがない。あのテレビでのポート  
のコマーシャル、一日一晩、親兄弟を大切にしよう、世  
界は一家、とかいっているのを見るたびに、何万のいや  
何十万の家庭を、何とも知らない何十万の女子供を、國の  
ギャンブルによつてメチャメチャにしているか、と思う。

俺がミーニー、音こころここと、とつまうの聲  
こ聞覺だか、そこにいくのに、子供の頃の傷、劣等感が  
起因している。

左ギフチ、貧しかつた家庭生活、大酒のみの親父、  
たえない父母のケンカ、中学だけの卒業、みんなかな  
つて、知らず知らずに性格がひずみ、それを酒によつて、  
ギャンブルによつて流して、この一晩半のドヤに住みつ  
いた。俺を、俺の性格を、決定的に打ちのめすギャンブ  
ル、競艇、競輪、競馬に、必勝法はない。あるとすれば、  
舟券、車券、馬券を買わないことだ。「ギャンブルは、  
レジャー」なんてあり得ない。これこそ「死に至る病い  
」だ。

んなに、勝負レースと思つても舟券を買わずに、あの九レースを平氣でみてゐる。決して帰らない。選手の気配と氣質を常に知つておくために、目をはなせないからだという。

予想屋でも自分で舟券を買う時にはこの人に聞きにきて  
いる。俺にはこの人のようなことはできない。この辛抱と冷静さを、俺はもつてない。レースの間には、俺は酒を飲む。時には、当つては飲む。敗けては飲む。最終レース終つた時は、ますオケラになつてゐる。むなし。

トヤに帰つてから、千円残していた金から、ショウチユウ一ぱいひっかけ、大めし、みそ汁飲んで、頭からうす汚れたふとんをかぶつて、七時には寝る。これを何百回くり返してきたことだろう。俺にとつてギャンブルは、

レジャーではなくて、人生のすべてなのだ。

ギャンブルの費用をさせぐために、朝五時にセント  
ドヤに帰つてから、千円残していた金から、ショウチ  
ユウ一ぱいひっかけ、大めし、みそ汁飲んで、頭からうす汚れたふとんをかぶつて、七時には寝る。これを何百回くり返してきたことだろう。俺にとつてギャンブルは、

レジャーではなくて、人生のすべてなのだ。

ギャンブルの費用をさせぐために、朝五時にセント  
ドヤに帰つてから、千円残していた金から、ショウチ  
ユウ一ぱいひっかけ、大めし、みそ汁飲んで、頭からうす汚れたふとんをかぶつて、七時には寝る。これを何百回くり返してきたことだろう。俺にとつてギャンブルは、

レジャーではなくて、人生のすべてなのだ。

五エ門の姫ゆでの話を。

五エ門最後の処刑の時、子供と共に姫に入れられ、あ  
つくない時は、子供を両手でさしあげていたが、死んだ  
時は、子供を足下にしていたといふ話を。終末が、俺と  
同じに思えてならない。

このギャンブル病にかかつたら、益々、出づれほん、  
出づつてはまへ、そこへいそ、出たら戻へ、そこへ  
そづれりらへた、迷惑をかけるし、世間一般の家庭  
生活は出来ない。

この不治の病にかかつた俺が、ギャンブルのむなしさ  
から逃避するところは、酒で泥酔することだ。ギャンブ  
ルに負けたときのむなしさ、二日酔のヘドが出る苦しさ。  
そして仕事にいく気力の消失。これを何百回繰り返した  
ことだろう。

昭和五十二年五月二十二日(日)の日記より。

「朝五時前に、起きてセンターに行つた。手配の車が  
きてない。仕事がない。みんなの目の色がかわつてゐる。

今日のシノギ代を、得るために。  
めしが喰いたい、酒をのみたい、部屋でねたい。なん  
とわびしい要求ではないか。

しかし、こんなになつたのは、自分がなしたせいであ  
る。これを忘れ、問題をすりかえ、他のせいにすること  
だけはしてはならない」

ギナンブルで負けた次の日、センターの仕事にあぶれ、  
ドヤのふとんにもぐつて書いた日記だ。何百回同じこと  
を繰り返すのだろう。人間は一度やつたあやまちは二度  
と繰り返さない、繰り返してはならないと聞かされ歌え  
られてきたが、この俺には全くあてはまらない。

俺の骨のズイにあるものは、昔も今も全くかわってな  
くて、年相応に熟度がひなびて、生きているだけなのだ。

俺は骨を焼かないと直らない。

この骨をぬく日は、持病と酒によつてはやめてくれる。  
いや、骨焼く費用で、迷惑をかける。早くどこかの病院  
に、骨焼く費用として、解剖用に登録して貰おう。

ふりかえるに、俺の旅は、コップの様な器の中で、酒  
とギナンブルというヤクザなものから、何百回と叩きつ  
けられるために、生きてきたものだつたのだろう。

もつと、ちがつた旅を、どうして、あと数年でもしよ  
うと思わないのだろう。

また、暮正月が、やつてきた。

たくわえは、まったくない。この調子だと、今年の正  
月はシノグるのかどうかわからない。コントロール出来な  
い自分が、自分のことながら心配だ。でも、正月は  
正月の風がふくさ。